

昭和24年 開校当時から改築された校舎です。
AIでカラー写真にしてみました。
(イメージが違っていたら、申し訳ありません)

こととい

<校訓> 自主 友愛 有能



令和7年7月24日 発行

発行責任者 校長 綾野 正巳

80年の思い

西春別中学校長 綾野 正巳

今から80年前の7月14、15日、米軍機105機が約350発もの爆弾や機銃掃射で市街地を破壊、8割を焼失し約400人が犠牲になった『根室空襲』がありました。当時小学生だった私の母は、幼い妹たちと一緒に戦火を逃げ回っていました。防空壕に避難していた時、「この防空壕はもう持たないから、違う防空壕へ逃げなさい!」と教えてくれた方のおかげで九死に一生を得ることができたそうです。私が母から聞いて覚えている話はそのくらいしかありません。生前にもっと聞いておけばよかったと後悔の念がありますが、あまり話したがいなかったことも記憶に残っています。生々しい恐怖を思い出したくはなかったのでしょう。



閉校に向けて教材室を整理しているとき、古い文集を見つけました。開いてみると、国語教諭が手作りした文集でした。

実は、1979年に北海道新聞で紹介されていました。

西春別中学校で行われてきた教育実践の素晴らしさに改めて敬意を感じると共に、私にもこんな機会があれば、母と向き合う時間がとれたかもしれないと羨ましく思いました。

「あすを拓く」第8集 特集『母の歴史』（文集文頭）おかあさん方へ ご協力ありがとうございました。
作文をしたというただそれだけでなく、とにかく「親子の断絶」などと言われている世相の中で、母から中学生が話を聞くと言うことは貴重な経験だったと思います。さらに「使い捨て」の物量時代に育って「もの」のありがたみやお金の価値を知らない子どもたちに、あの敗戦前後の品不足の苦しみや開拓の苦労を伝えることはとても大切なことだったと思うのです。きっと子どもたちは『母の歴史』からたくさん学んだことでしょう。これを機会に親子の対話が進み、心のふれ合いが深まるように期待したいものです。

「戦争はまっぴら・・・」 『母の歴史』より抜粋

母は、昭和11年、高村光太郎の「智恵子抄」で知られている安達太良山（阿多多羅山 あだたらやま）の見えるところで生まれた。母の生まれた土地は代々和紙の生産地として知られていた。

母が小学校2年生の時に初めて空襲があった。空襲という言葉がわからず、先生の言う通りに机の下に隠れた。3年生になってからは、警戒警報、空襲の繰り返しである。サイレンがなると学校は休みになった。乾燥した大麦を入れた納屋に6月12日の夜、焼夷弾が落ちた。あちこちの田んぼや山の中にも焼夷弾が落ちた。それから終戦の8月15日までの2ヶ月は、夜はまくら元に包帯・傷薬の入った救急袋をおいて寝た。母は、ノミ・蚊におそわれながら火を付けないでラジオに耳をかたむけながら過ごしたという。

それから34年が過ぎた。でも、今年の8月15日、矢臼別の演習場では朝から自衛隊の地響きのする砲弾訓練がつづいた。母はつぶやいた。

「仏を供養するお盆と、終戦記念日ぐらい、生者も死者ものんびりゆっくりと心を休めたいものだ。」

「自分の国は自分で守らなければ」と言うけれど、戦争はまっぴらごめんだ。」と母はいった。

また母は、「今は平和ながらも物がありすぎて困るくらいだ。」という。

終戦後の食糧不足の中での開拓は戦争の次に大変なようだった。

今年は、低温で作物が心配されていたが、それでも元気にたくましくのびる雑草。この雑草のようにたくましい人間に成長してもらいたい。これが今の母の私たちへの希望である。

当時の中学3年生はもう還暦を迎えられたと思います。時代は変わっても、親や教師が子どもたちの幸せを願う気持ちは変わりません。夏休み中に、メディアを閉じて、親子の会話、祖父母との会話の時間が増え、思いが受け継がれていくことを期待しています。